

蘇芳集



弓張月

高橋 さえ子

宵 闇

青山

丈

みづうみのあをきに閉づる秋日傘

水面テの硬しか秋の水すまし

地藏盆遠山裾は灯を点し

盆過ぎの石灯籠でありにけり

水音の身に入む癒えもまた遅々と

「玉杵」といふ琴の銘桐は実に

琴糸を締めて弓張月の指

名を知らぬ花のどれもが草の花

宵闇を噛み切れぬもの噛んでをり

釣瓶落しや改札でふりかへる

人を見るやうに残りぬ白木槿

金木犀やあちこちの水たまり

足許にまで下りてきて秋の蝶

颯風の余波ストローを転がせり

靈山

長沼三津夫

靈山の靈水として澄みきつて
澄みきつて靈水の名を欲しきまま
鱒雲ふる里遠くなるばかり
月明の庭石として微動だも
先生の一語一語や秋深む
月明の海鳴りのふと己が名を
月明の澄みきつてわが生誕日

けふ掃かず

野路斉子

颯風一過棕櫚の葉のみに風残し
道迷ふ萩のすつかり刈られるて
表札のなき家流行る寒さかな
木の葉降るまた始めからはじめから
同窓と告げて秋日を子と並ぶ
積む本の中の童話よ文化の日
木犀の花散りやまずけふ掃かず

濡れいろ

前田陶代子

露草の濡れいろ美しく師の忌くる
碑のかたちには秋の澄めりけり
人ごゑのはればれ秋の百日紅
杜といふ真昼の暗さつくつくし
湧水の音無き音を聞いて秋
水辺りのゆたかな刻を桐一葉
一本にして鶏頭のまくれなる

草の花

宮尾直美

遠くなるものに青春赤とんぼ
母恋ひは年寄るほどに草の花
星月夜洗ひ晒しのスニーカー
土牛の絵より秋風の吹き初むる
盆唄のさびさび月の隠れけり
露けしや二つ並びて遍路塚
遥かなり秋雲流れゆくとこる

萩ひらく

八木下 末黒

良 夜

小川 美知子

極楽寺 山門前の白芙蓉
茅葺きの山門くぐる秋のこゑ
極楽の色となりけり百日紅
大風の後を散り敷く百日紅
軍勢のごとき刈萱井の滅ぶ
降りだしの雨や一粒萩ひらく
涼あらた極楽寺坂下りゆく

相模大山

吉田 幸敏

夜 長

金田 きみ子

丹の橋を渡れば御師の里の秋
御師の名は和田仲太夫一位の実
老木地師さやかに語る独楽のこと
水うまき相模大山新豆腐
阿夫利嶺のあたり秋雲湧きつげる
もうぬぬといへば空よりつくつくし
鰹木の高さ秋津の浮く高さ

現し世に臆せば老いぬ草の花
草ひばり鳴くよ明るき雨が降り
住み古りし田舎マンションちちろ鳴く
きつちりと卓の片づく夜長かな
夜の長し己の影へ声出して
秋の夜の机辺落ち着く野草挿し
平穩無事庭の小菊に日の射して